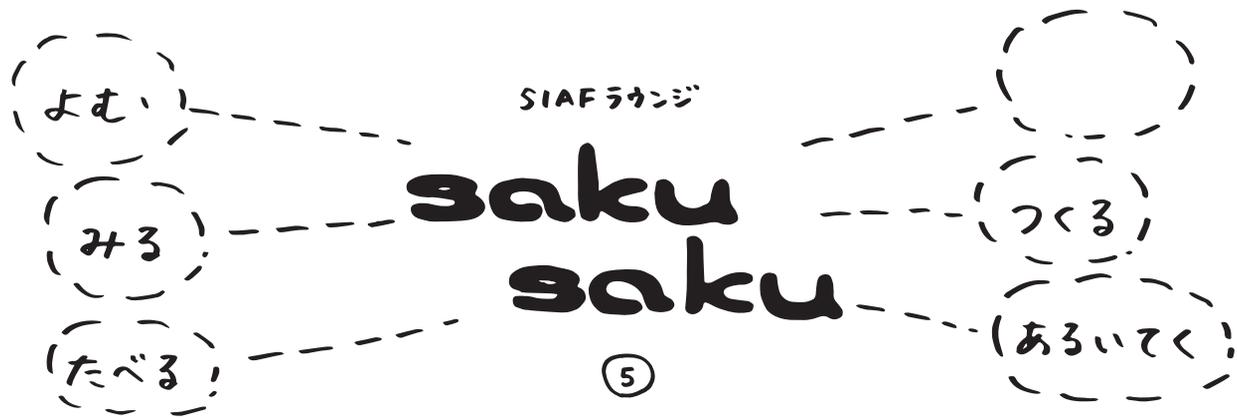


ごごうめの
“さくさく”へ
ゴー!ゴー!



サイアフ・ラウンジの歴史

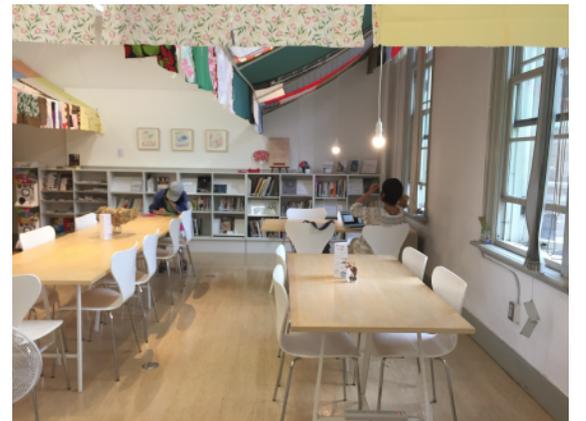
2017 → 2018

実践期 “2回目の「SIAF」”

vol. 05

【前回までの歴史】

2014年の札幌国際芸術祭（以下 SIAF/ サイアフ）初開催から次の2017年までの間、SIAFと市民とを繋ぐ「SIAF ラボ」の活動を軸に「SIAF ラウンジ」と「SIAF プロジェクトルーム」は機能してきた。そしてよいよ、SIAF ラウンジが始まってから初めての SIAF、通算2回目となる SIAF2017 が開催されることになった。



SIAF2017では、SIAF ラボがこれまで培ってきた活動を、芸術祭にどのように活かせるのかということに焦点が当てられた。2015年10月に大友良英氏がSIAF2017ゲストディレクターとして就任する。SIAF2017を市民がより参加できる芸術祭としてめざすことが改めて確認され、そのためにはいったいどうしたら良いかという議論が活発になっていった。それにともなって、SIAF2014の終了以来、SIAFと市民をつなぎ、SIAFへの市民の自主的な参加を促し、その活動を広く担保してきた SIAFラボの活動の集大成を、ここにきて円滑にSIAF2017へと接続することが求められたのである。

そうした指針から、大友ディレクターの意向でSIAF2017のテーマは「芸術祭って何だ?」となり、札幌市資料館はSIAF2017への入り口として、このテーマを市民一人一人が考え、試し、共有する場として機能することが決定した。具体的には、札幌市資料館は「市民とアーティストが出会う場所」として、会期中様々なアートプロジェクトが行われることになった。館内にはアーティストが常駐し、展示やワークショップ、市民参加型のプログラムが積極的に行われた。2階の旧応接室にはテラコヤーツセンター「土砂」が設置され、テニスコートのさや、植野隆司とMC MANGOが滞在して、訪れた参加者と一緒にたくさんのお出来事を作り出していった。

そうした中、SIAF ラボが継続してきた活動は、会期中、SIAFの間口をより多くの人へと広げる役割を果たしたといえるだろう。まずSIAFラボの企画メンバーは、大友ディレクターのテーマに呼応し、CAMP SITE PROJECT『裏庭』という、資料館の裏庭を「キャンプ場」として機能させるためのプロジェクトを行った。アーティストのタレントを招聘し、参加者と一緒にミーティングを重ね、交流イベントやワークショップを開催して、様々なコミュニケーションを生み出した。

また、札幌らしさをリサーチし市民目線の芸術祭普及を模索してきた「SIAFラボ編集部」のメンバーは、これまでの成果をもとに、SIAF2017においてどのような広報を行ったら良いかについて話し合った。そしてSIAF2014の「SIAF編集部」を、SIAF2017では「サカナ通信」という名前に変えて広報活動を行っていくことになり、そのアイデアの1つとして制作されたのが、「回遊魚」という回遊板形式の広報ツールである。「回遊魚」はおすすめの鑑賞ルートや実際に展示会を見た人の感想などを掲載して、読んだ人が回遊形式で他の人に回していくというもので、ある意味、社会実験も兼ね備えた情報発信が行われたのである。

そしてSIAF ラウンジは、もともと備えていたカフェの機能を生かして、会期中はSIAF全体のインフォメーションセンターの役割を担った。館内イベントへの参加者、休憩中のアーティスト、札幌観光に訪れた方などが誰でも気軽にやってきて、交流することのできる多目的な場所として、室内にはぎわいを見せた。天井には「大風呂敷プロジェクト」*の布を使った屋台のような装飾が施され、インフォメーションカウンターが新たに設置され、SIAF2017のグッズも販売された。

こうして、SIAF2017への接続をもって、市民と芸術祭をつなぐというSIAFラボの活動は、一定の役割を果たしたということが出来るだろう。そして、これまでSIAFラボの活動を軸に活動してきたSIAF ラウンジは、次のSIAF2020へと向け、新たな体制をとっていくことになるのである。

* SIAF2017の前夜祭プログラムとして「さっぽろ八月祭2017」が開催された。その際、札幌市北3条広場（アカプア）から赤れんが庁舎（北海道庁旧本庁舎）まで古布を継ぎ合わせた大風呂敷が敷かれ、その上で市民らが盆踊りを踊った。

SIAF ラウンジとわたし。 元札幌国際芸術祭実行委員会事務局長 熊谷 淳

YouTube でデニスコーツの「月の音」という曲を検索すると、毛筆で書かれた様々なメッセージをカメラが延々ととらえていく…というバージョンの映像が見つかります。これが撮影されたのがここ札幌市資料館。2017年10月1日「札幌国際芸術祭2017」最終日の夜のことでした。

「…もう何も無いけど、あそこに行ってみたら何か残っているかもね…」
「…僕はここに残ってもっと遊んでいたいけど、もう誰もいないよ
楽しかった人たち、みんな月に帰ってしまった…」

という歌詞が、まつりの終わった大きな喪失感にあまりにふさわしくて、今聴いてもあの時の色々な気持ちが蘇ってきます。

SIAF2017 では資料館がメイン会場の一つとなり、3年ごとのSIAFをつなぐこのラウンジも、2017のシンボルの大風呂敷に彩られたインフォメーションとして多くのお客様や関係者たちをつなぐ拠点となったのです。

会期中は毎日のように通っていたSIAFラウンジ…。あの映像が撮影された時も、僕は撮影をしていたデニスコーツの植野さんと一緒にSIAFに寄せられたメッセージをなぞっていたのです。今もコーヒーを飲みながら立ち寄りますが、来るたびにその時々SIAFの動きを反映してちょっとずつ変化していきます。次回SIAF2023に向けてラウンジがどんなふうに変っていくのか、どんなふうにならなくなるのか、今からとても楽しみにしています。

[SIAF2017 コラボスイーツ]



カフェの、ちょっといい話？

2017年開催のSIAFでは、期間中に札幌市内の飲食店やショップとコラボレーション。各店で期間限定のメニューや特典を楽しむことができました。(SIAF2017についてはおもて面の記事をご覧ください) SIAFラウンジでは特設コーナーで3種類のコラボスイーツを販売。おなじみのあの味からSIAFカラーがおしゃれなクッキーまで、どれも注目の的となりました。

1955年の発売以来、道民にはおなじみの塩味ビスケットが登場。SIAFの会場では、製菓工場に併設されている驚きの私設博物館「レトロスペース坂会館」の秘蔵コレクションが展示されて話題となりました。



第5回テーマ「Rest In Peace」

SIAF2017では「市電プロジェクト」都市と市電」と題された、札幌市電とその近隣の地区に注目したイベントが多数行われました。その中の一つがアーティスト「指輪ホテル」による「Rest In Peace, Sapporo」ひかりの街をはしる星屑」です。ここで今回は指輪ホテルの芸術監督である羊屋白玉（ひつじやしろたま）さんにまつわる本を、ラウンジの本棚から紹介します。



上：羊屋白玉監修記録集『東京スーパとブランケット紀行2014-2017』（アーツカウンスシル東京） 下：羊屋白玉監修『東京スーパとブランケット紀行ためらって、さまよって、とむらい』（アーツカウンスシル東京）

取り上げるのは『東京スーパとブランケット紀行2014-2017』と『東京スーパとブランケット紀行ためらって、さまよって、とむらい』。『東京スーパとブランケット紀行』は羊屋さんの愛猫が亡くなるときのスーパを持ってかけた友人と、猫のとむらいについて、そして自分自身のとむらいについて語り合った5日間の出来事から始まったものです。とむらいの対象はやがて東京という都市にまでひろがり、東京の過去と未来を見つめ直す3年以上に及ぶ試みへと発展しました。その後羊屋さんの想いは戯曲『Rest In Peace, Tokyo. 安らかに眠ってください』。この言葉は、しばしば、生きていくものや、ペテン師の騙（かた）りである』にまどめられました。

何かが終わる、また生まれることで移り変わっていく札幌の姿を、長く見つめてきた市電。そしてそれにまつわる風景や、もの、出来事を大切に拾い上げたSIAF2017での演劇作品。その作品制作に至った想いが2冊に垣間見えるかもしれません。

一石を投じる。

札幌市資料館の前にある巨大な石を知っていますか？ SIAFラウンジの窓からその姿を見ることができます。ゴツゴツして飾り気がない、一見すると「ただの大きな石」は一体なんなのか？そして何故ここにあるのか？それはSIAFの歴史とともに語ることができます。この石はSIAF2014の時、アーティストの島袋道浩さんによって札幌に運び込まれました。当時は赤レンガテラスのある北3条広場に展示されており、「一石を投じる」という作品名がつけられました。SIAF2014のディレクターだった坂本龍一さんと札幌を訪れた島袋さんは、人工的で直線的なつくりの札幌を見て、その整然さに対比する自然なものを札幌に持って来たいと考えました。



それには色々なものがあった方が豊かで楽しい街になるんじゃないかという思いもありましたが、それ以上にアーティストの役割は社会に「一石を投じる」ことにあるという考えがあったからだと言います。日常の空間に異物を放り込むことで、意外な刺激を受け、自分たちの生活する環境を考え直すことがねらいだったのです。芸術祭期間が終了した後も「一石を投じる」は札幌の街に残ることになりました。場所は札幌市資料館が選ばれました。綺麗に整備された大通公園と自然の姿が剥き出しの石。忙しく動く社会と微動だにしない石。変わり続ける街並みと変わらない石。そんな日常のできごとと比べながら見てみてはいかがでしょうか？

植物図鑑 03

【ラベンダーさん】

窓辺で静かに佇むラベンダーは資料館職員の方から頂いたお花。1年通して綺麗な紫色で、ラウンジに彩りを添えてくれる存在です。すこし顔を近づけるとラベンダーのいい香りがふんわりと漂います。窓際席がお気に入りの方はぜひラベンダーの香りを感じてみてくださいね。

